〔書　評〕

ロイ・アンドリュー・ミラー著『日本語』

福島邦道

著者の Miller 氏は、日本語の研究で著名な B. Bloch 博士（一九六五年逝去）の教えを受けた方であり、同門の S. E. Martin 氏などともにいわゆる Yale 学派に属する日本語学者である。日本語についての論著はほかに

Some Japanese influences on Chinese classical scholarship of the Ch'ing period, JAOS 72. (1952)

A Japanese reader, graded lessons in the modern language, 1962.

The reconstruction of the Japanese vowels, Papers of the CIC Far Eastern Language Institute, Indiana University, 1964.

がある。本書はこの著者が長年手がけてきた日本語の綜合的研究の成果であり、特に日本語の歴史的研究の成果がふんだんに取り入れられていることなど、アメリカにおける他の日本語研究書にはほとんど見られないものである。本書の巻末に、List of Plates として仏足石歌以下キリシタン版落葉集にいたる二十五葉の写真がかかげられているが、その中で、和名類聚抄の元和活字版、源氏物語および宇津保物語の整版、徳川時代の書簡は Yale 大学蔵本であり、十八世紀の書簡は著者の蔵本であり、これによっても Yale 大学の日本の文化財に対する関心の度合がわかるのである。

本書は次のごとき構成をなしている。短い序文の後、八章に分けてあるが、括弧内の数字は割り当てられたページ数である。

1. Historical and Geographical Setting (58 pp.)
2. Genetic Relationship (31 pp.)
3. Writing Systems (49 pp.)
4. Dialects (33 pp.)
5. Phonology (63 pp.)
6. Loanwords (33 pp.)
7. "Special and Notable" Utterances (40 pp.)
8. Grammar and Syntax (48 pp.)

Notes
Bibliography
Word Index
Subject Index

各章の内容は、内外の諸研究をよく参照し、それらを基礎としてその上に立って研究を進めているのであるが、それらの諸研究には、日本語や英語で書かれたものはもとより、ドイツ語、フランス語、さらにロシヤ語のものにまで及んでいる。本書の序文には、ちょうど執筆している時に出版された B. Lewin 氏の Abriss der Japanische Grammatik, 1959 に特に負っている旨記してある。ともあれ、これだけ広い視野に立っての日本語研究書は、日本はもとより、欧米にも例がないのではないかと思われるのである。

著者の日本文学および日本語についての知識は全般に非常に深いように見うけられるのであるが、訂正してほしいものもある。たとえば、人名のよび方で、Ki Tsurayuki（紀貫之）とあるのは no を入れてほしい。また、Seami（世阿弥）は Zeami である。数年前、Wenck 氏に「世阿弥」と書いてどうして Zeami と発音するかと聞かれ、私は即答できず、小西甚一氏に教えてもらったことがあるが、日本の人名のよび方にはなかなかむずかしいものがあるのである。

iroha（いろは）（p. 127）の後半を

uwi no oku yama　keFu koete
asaki yume misi　weFi mo sezu.

としているのは、B. H. Chamberlain 氏の訳文

Crossing today the uttermost limits of phenomenal existence,
I shall see no more fleeting dreams, neither be any longer intoxicated.

を参照しているのであるから、koyete, mizi と訂正してほしいのである。

以下各章の内容について概略述べることとするが、今後それぞれの方面の専門家によって深く検討されたいと思うものである。

第一章は「歴史的地理的背景」であって、Marco Polo の「Zipangu は東の海洋にある島である」という文の引用からはじまり、日本の地理、歴史、文学についてくわしく説明している。約九千四百万の人々が十五万マイルの土地に住んでいるが、これはほぼ California の広さであり、その変化ある気候は South Dakota から Louisiana にいたる地域に似ているとしている。歴史では、考古学的に縄文および弥生文化から説きおこし、Wei chih（魏志）に見える日本語について、identifications の困難であることや linguistic data が不足していることを知りながらも、相当つっこんだ意見がのべられている。

文献時代に入って、万葉仮名で書かれた作品からはじめて、平安・鎌倉・室町時代の文学作品について適切な説明がなされている。普通の文学史と異なり、mission presses（キリシタン版）について詳説しているのは良いが、Shōmono（抄物）についてははなはだ物足りない。徳川時代のことばを early modern Japanese (Kinsei nihongo; Neujapanische) とし、さらに明治から第二次世界大戦後の日本語まで概観してある。国語史、特に口語の歴史にくわしい学者が協力されたなら、この章の記述は一段と光彩を添えたであろうにと惜しまれるのである。

第二章は「系統論」である。就中、日本語と朝鮮語の同系問題についてくわしくのべられているが、両者の系統については今まで chaotic な状態であったものが、Martin 氏によって明らかにされたとして、Martin 氏の Lexical evidence relating Korean to

Japanese, Language, Vol. 42, No. 2, 1966. によっているのである。ちなみにこの論文は日本の学界にはあまり知られていないようである。私は Martin 氏より恵送されたが、いまだ十分読解していない。Martin 氏や Miller 氏の考え方は、たとえば、「さひ（鋤）」について、

Old Japanese　Korean　Proto-Korean-Japanese
saFi "spade"　sap ＜ salp　*salpyi

のように考え、日鮮両語がまったくの好機の結果、形や意味で似ているのは、どちらかが借用したのであり、共通のアルタイ語からそれぞれ独自の発展を遂げたもので、そのもとに Proto-Korean-Japanese というものを設定していることである。この考え方をおし進めると、日本語がアルタイ語に属する証左として、Korean をはじめ、Manchu, Mongol, Chuvash, Tungus, Turkish, Evenki などから日本語に比定される多くの語彙が引き合いにだされてくるのである。著者は、A. Meillet 氏の「比較文法では歴史的に変則的な形も古い規則として理解できる多くの証拠がだせる」ということばを引いて自説を固めているが、あまりに語彙論的な系統説でありすぎる。もとより、最近の言語年代学の成果を参照して日本語と朝鮮語の水深を考えられたり、日本語の祖語を探るために首里語との比較もなされているが、本章全体の印象としては、アルタイ語としての日本語という考えが強くうちだされているのである。

第三章は「文字体系」であるが、漢字の音と訓の問題に重点が置かれ、平仮名や片仮名などは比較的簡単である。朝鮮を経て漢字が渡来し、まずその訓の問題点をくわしくのべ、宛字にまで及び、例の shan shang fu yu shan（山上復有山）のようなものにもふれている。次に呉音と漢音とについて、両音の性格や相違が実によくしらべあげてある。ただ、両音の用例が上田万年氏の大字典からとられていることであるが、日本の漢字音研究の第一資料によって、もっと根本的な考察を加えてほしかったと思うのである。

漢文訓読についても詳説してあるが、一字も漢字を用いずに説明するのだからなかなかむずかしいことである。wei jen suo mao が hito no nonoshiru tokoro to naru と読まれることについて一ページ (p. 115) を費やしているが、われわれには「為人所罵」の四字ですむところである。さらに文選読の説明も二ページに及んで説かれているが、築島裕氏の著名な学説は残念ながら御存じでないようである。

以下、万葉仮名、変体仮名、平仮名、片仮名、送り仮名の問題から、戦後における漢字の字体や当用漢字のことまで論及している。図表以外、本文には一切日本の文字が用いられていないので、この章に関するかぎり、日本語をよく知らない人々に十分な理解が得られるかどうかいささか心配ではある。

第四章は「方言」である。はじめに日本列島の事情と方言研究の歴史についてのべている。アクセントという術語について、昔は中国から借用した「音調」ということばが用いられたが、今日では英語から借用した accent がもっとも普通に用いられている。しかし、それは

English "accent" is a matter of stress and loudness differences rather than of relative pitch, the choice of this term was not a completely fortunate one. (p. 149)

として、pitch ということばを用いて、accent ということばは本書

の中では一切用いていないのである。もっとも、同じ Yale 学派でも Martin 氏は On the accent of Japanese adjectives, Language, Vol. 43, No. 1, 1967. のように accent を用いているのである。ところで、本章の重点は方言区画に置かれており、本書の図表五葉中四葉は区画に関係ある地図である。すなわち

第二図　県の分布と主要都市

第三図　アクセント (Pitch Contrast Phenomena) による主要方言区画

第四図　国 (Pre-modern 'Country') の分布

第五図　東西方言区画における主要等語線

となっており、東日本・西日本・九州の三地域の特徴からはじまり、その下位分類 (sub-division) におよび、各地域の特徴をのべている。しかも、現在の東西方言の差異が遠く奈良時代にまで溯るとして、東歌・防人歌や上代特殊仮名遣における音韻の混同にもふれている。さらに、古代方言には純粋な日本語でないものもあるとして、風土記に見えることばで、大隅の fisi (sand bar) や isa (vulgar word for whale) をマレイ・ポリネシヤ語とむすびつけている。「注」によれば、これはドイツの Karow 氏の研究によったとのことである。これらのことばについての比較言語学的研究の priority は、Miller 氏はお気づきになっていないが、すでに新村出氏の研究にも見えるのであり、しかも新村氏の論述の方がはるかに控え目である。こういう問題について、一般に外国の学者の立言は大胆なように見受けられるのである。

第五章は「音韻論」であるが、実際は「史的音韻論」であり、内容ももっとも充実している。古代日本語を知るためには万葉仮名の音価をしらべねばならぬとし、Karlgren 氏の Middle Chinese によったり、Y. R. Chao (趙元任) 氏の suggestion によって、甲乙二類の音価についてのべ、甲乙の発見は本居や石塚によるものだが、橋本進吉氏のは independent discovery であるとし、ヨーロッパでは Pletner 氏が一九三六年、Pierson 氏が一九三三・一九三六年に紹介しているとしている。有坂秀世氏の業績について、

> Arisaka until his untimely death was probably the greatest Japanese historical linguist of modern times, and his treatment of the early written records of Japanese is an important contribution to world scholarship. (p. 177)

と言っているが、けだし至言である。ただし、著者は甲乙の音価を考えるにあたって、L. Schwartz 氏の A Survey of the Satsuma dialect, TASJ 43, 1915 によって、薩摩地方と東京との母音のくわしい比較から、方言音を甲乙の音価推定に積極的に適用しているが、こういうやり方はすこし問題があるようである。アメリカでは、著者ばかりでなく、Hoenigswald 氏や Marchand 氏にも関連する研究があるとのことである。また、古代の母音組織について、泉井久之助氏の研究を ablaut system の研究として図表を入れてくわしく説明している。泉井氏の研究は『音声科学研究 (Studia Phonologica) 一九六一年』にも再録され、これには適切な summary が付載されているので、これを敷衍して意見をのべられたら一層興味深かったと思われることである。

著者はこのように新しい研究をよく読んでいられるのであり、頭子音についても、たとえば、サ行音について、有坂氏の〔tˢa si tˢu se tˢo tˢô〕をあげるとともに、馬淵和夫氏の〔sa̋ si̋ sű se̋ ső〕

をあげ、馬淵氏の意見は有力であり、将来において留意すべき価値がある（p. 193）としている。また、子音で、中国語の末音である -p, -t, -k, -m, -n, -ng の日本での受けとめ方やいろいろな撥音現象についてものべている。さらに注意すべきことは、朝山信弥氏の発見された pre-nasalized initial glide（頭音節における鼻濁音）をきわめて高く評価し、浜田敦氏はそれをより広く実証したものとして、両氏の説を the Asayama-Hamada theory（p. 223）としている。濁音に鼻音を伴なった例として、Hou-lin yü-lu（鶴林玉露）の例などもあげられているが、実はこの書の解読をめぐっては、朝山氏と浜田氏とでは考えがちがうのであって、著者は朝山氏の「鶴林玉露の『黄榜』などについて」（国語国文、昭和一二年一二月）は読まれていないようである。以下、中世日本語から現代にいたる重要な音韻変化についてのべ、東京および京都のアクセント型を対比し、東京アクセントが優位に立つであろうことまでのべている。

第六章は「外来語」である。ことばは greedy であり、どんな言語も自分だけのものに満足するものはなく、語彙を外来語によって増しているが、日本語は、その歴史から知られるように、これほど外来語に対して寛大なものは外の言語は見られないと言って、日本が、歴史的に各国から借用したことばについて詳説している。

まず中国から借用したことばとして、Karlgren 氏によって、塩、蚕、杉など二十二語をあげるとともに、亀井孝氏の反論をもあげている。両説について、この種の借用したことばの正否についての議論は不幸にも無駄で、可能性や蓋然性を截然と区別するのはむずかしい（p. 237）としている。これはまったく驚き入った見解である。亀井氏の Chinese borrowings in prehistoric Japanese, 1954. は、Karlgren 氏の安易な比定に対して、実証的な方法によってそれが謬見であることを明らかにしたものであるからである。Miller 氏には、日本語は非常に多くのことばを中国から借用しているという考えが牢固としてあり、それが Karlgren 説を抜け出せなかった原因であろうが、欧米の東洋学者には渺たる日本列島の文化は大陸文化の移植なくしては考えられいという僻見が一部には根強いようである。

以下、朝鮮語・アイヌ語・ポルトガル語・オランダ語・ドイツ語・フランス語・梵語などから豊富な用例を引いて説明しているが、特にヨーロッパからの外来語については、原語との identification がお手の物のせいか内容も興味深いものが多い。英語では "one-man car" "stand bar" のようなへんてこな日本製英語のことまでのべている。しかし、何といってももっとも多い外来語といえば、中国から借用したことば、すなわち漢語であって、国際的なオリンピックの出発の合図の「位置について！　用意！　ドン！」で、純粋な日本語といえば、「に」という助詞と「ついて」という動詞だけなのであると皮肉たっぷりに結んでいる。

第七章は「特別にして注目に値する発話」についてであるが、これは日本の敬語法などをさしている。こういう標題は、本章の冒頭に引用してある L. Bloomfield 氏の "Language, 1933" に見える

文学は、美しい発話あるいはその他の点で注目に値する発話から成り立っている。文学の研究者は、発話の内容と、その形式の特別の特徴とを問題とする。（日本語訳本二五ページ）

から来たものであるが、日本にも Bloomfieldians は多いことと思うが、こういう巧みな日本語への適用は国語学者には見られないよ

うである。

敬語については、humble に対する elegant について、いろいろな場合のことをのべており、「してやる」や「してあげる」など Donatory verbs の図表もおもしろい。発話の基礎となる basic を土井光知氏の研究によってあげるとともに、consciousness については『敬語と敬語意識』によってくわしく分析している。著者の発話についての repertoire はきわめて広く、口三味線の調子からはじめて、特別にして注目に値することばとして、忌詞・枕詞・掛詞について説明するとともに、D. Keene 氏によって近松の道行文の特殊性にもふれているのである。

第八章は「文法とシンタックス」である。日本における文法研究の歴史として富士谷成章や義門のことをのべ、明治になって新しい文法術語を用いたことに及び、今日の日本語教育における日本文法の体系は全般的に橋本進吉氏のなしたものであるが、彼の品詞分類において、その術語はまったく英語の翻訳文法のそれに負っている (p. 315) としている。Miller 氏は日本の既成文法にとらわれずに、品詞を大別して verb, adjective, copula, noun, post-positions, or grammatical particles の五つに分けている。この分類法には日本語の実情に即しているものがある。かつて Ramstedt 氏が A. Korean Grammar, 1939 において、品詞を noun, verb, particles and all uninflected words に三大別したことについて、河野六郎氏はその書評（「東洋学報」昭和二八年三月）において

朝鮮語の形態構造は日本語の其れに酷似し、従つて日本語の文法体系に範を取ることが便利であると思はれさうであるが、国語学におけるあの煩瑣な分類が日本語の構造記述にとつても必ずしも適当であるとも思はれない以上、国語の品詞分類などに拘泥する必要はない。元来文法記述の体系は実用的乃至技術的なものであつて、実用の効果の多いもの、従つて弾力性の多いもの程よい訳である。この意味に於て上の三分類法は便利である。

と評されたことがあるが、このことばは Miller 氏の五分類法にも移してもって言えるのではないかと考えられる。動詞および形容詞については、現代語の活用現象とともに古代語の活用にも及んでいる。copula は「だ(な)」や「です」についてのべている。名詞は、general nouns, prenouns, interrogatives, copular nouns, quantity nouns, participial nouns の七つに下位分類している。quantity nouns とは数詞のことで、例の比較言語学的なこともべている。post-positions, or grammatical particles は助詞などをさしている。

シンタックスは、文の構成成分となるべき重要な要素を二十ぐらいきめておいて、実際の文においてそれらがどんな風に現れるかを観察している。最後に「係り結び」にもふれているが、日本語およびその歴史について、イギリスの G. Sansom 氏が日本の歴史について、

I do not see history as a pageant but as a motley procession with some bright banners but many dingy emblems, marching out of step, and not very certain of its destination.

と言ったことばが、*mutatis mutandis* 日本語の場合にもあてはまるという象徴的な表現でこの章を終っている。

巻末には「注」「参考文献」および「索引」がある。「注」は、各章ごとに付けられていて、それぞれのよるところを明示してある。「参考文献」には多くのわが国の学者の研究が引用されている。「索

引」には、ローマ字ばかりでなく漢字も付載されていて、本文の欠を補っている。

終りに、アメリカにおける有数な日本語学者に対し、非礼な言辞を弄したことについては、学問のため御海容を乞うものである。

(Miller, Roy Andrew, The Japanese Language, The University of Chicago Press, 1967, pp. 480, $16.00)

追記

本書にはすでに Toronto 大学の John, J. Chew 氏による書評 (Language, Vol. 45, No. 1, March 1969) のあることを、こまつひでお氏に教えられた。氏の御好意でそれを読むことができたのであわせかかげておく。七ページにわたるものであるが、私見はさしはさまず、その要点を紹介することとする。

――・――・――・――・――・――・――

Miller の本を Sansom の文法書の代わりにしたいと思う者にとっては、落胆させられよう。Miller の本は Sansom の本を大幅に追補したもので、研究者は両書を買う必要がある！ Miller の本は勿論最新の研究であり、Sansom のにない音韻論やすぐれた書誌が用意されている。以下各章ごとに取り扱いたい。

第一章では各時代における言語状態の主要な記録が報告されており、この章は全般にあまり専門的でなく、読み易く書かれている。

第二章では日本語と朝鮮語およびアルタイ諸語との同系関係が論ぜられている。日本語と朝鮮語との関係は、不備ではあるが信服させる記述であり、アルタイ諸語との関係は綿密に専門的にのべられているがあまり信服できない。例をあげて疑問点をのべ、印欧語の方法を、日本語―朝鮮語―アルタイ諸語に適用することは困難であるとしている。

第三章は優れた章であるが、文字にローマ字しか見られないのは、本の経費を節減したためではあるが、賢明なことではない。

第四章には日本における方言研究の報告があるが、それらはアクセントや語彙研究は強いが、音韻やシンタックスは弱く、Miller はこれを歎いている。Miller は方言区画を行なっているが、境界といっても少なくとも相互に方言のわかる連続帯があるはずである。終りの方で、日本語とアイヌ語の関係を扱っているし、Malayo-Polynesian からの借用語のことは細心な言語学者をも刮目させよう。

第五章はもっとも均衡のとれない書き方をしている。一二〇〇年にわたる注目すべき音韻変化が扱われているが、全体で六二ページ中、二〇ページは古代の八母音についてであり、一四ページは鼻音節についてであり、残りの二八ページにいろいろな問題があり、現代日本語の/i/と/u/の無声化は全く除外されている。以下細字で二ページにわたり評している。評者は八母音の音価推定に薩摩方言音を参照したことは諸なっているが、それによる推定音価が橋本や有坂のと矛盾撞着することものべている。

第六章は読み易い章で、日本語には思わぬ起源のことばのあることが示されている。

第七章はスタイルや文学的な技巧が扱われている。

第八章は落胆させられるが、興味のないわけでなく、主に現代語が扱われている。分析は Bloch や Jordan に従っている。Miller は「かな」が正確な言語形態の記述を妨げるとしているが、かれ自

身がその「わな」におちこんでいる。しかし、Martin や Yokoyama はその「わな」からうまくのがれている。失敗の例は、たとえば、受身と使役である。

要するに、『日本語』はあらゆる真面目な日本語研究者の必読書である。

――・――・――・――・――・――

Chew 氏は、奥津敬一郎氏（文学語学、四八号）によれば、A Transformational Analysis of Modern Colloquial Japanese (1961) によって学位を得られた方とのことで、そのせいか、本書の第八章の批評には手きびしいものが見受けられる。

Chew 氏のほめている Sansom 氏の An historical grammar of Japanese (1928) は、欧米の日本語研究者によく読まれているようで、新しい版が出ている。本書は山田孝雄氏の文法書にもとづいて書かれたものであり、日本人は山田文法そのものについて研究するので Sansom 氏の書はあまり読まれていないようである。

ちなみに、Sansom 氏の書のことは、すでに亀田次郎氏「国語学書目解題」（国語科学講座）や福井久蔵氏『国語学史』などに適切な紹介がある。戦後に出た『国語学』（国語国文学研究史大成）では一顧も与えていない。これからの国語学は外国人の日本語研究でもとるべきものはとり入れるという広い態度がなければならない。

―実践女子大学助教授―